

様式第2号（第8条・第9条関係）

令和4年11月23日

白老町議会  
議長 松田 謙吾 様

白老町議会議員  
会派代表者 大淵 紀夫 印

派遣結果報告書

日時（期間）	自 令和4年10月20日 至 令和4年10月22日
目的地	栃木県小山市 群馬県富岡市
派遣者	代表者 大淵 紀夫 構成員 森 哲也
調査事項	高橋房次氏の生涯について 富岡製糸場を核とした観光振興・地域振興
視察の成果 （具体的に）	別紙に記載

※ 必要の都度、写真その他を添付すること。

## 1. 栃木県 小山市

### 調査事項：高橋房次氏の生涯について

栃木県下都賀郡乙女村(現小山市乙女)は高橋房次氏の生誕の地で、農業を営む父と産婆をしていた母の間に九人兄弟の五男として誕生しました。明治37年に念願の医師となり、日露戦争に従軍したのち北海道に渡り、大正11年、北海道旧土人保護法に基づいて新設された道庁立白老病院の院長として迎えられます。

高橋房次氏はアイヌの人たちを決して差別することなく、貧富の区別もなく献身的に診療に従事し、白老の地に深く溶け込みながら町民から厚い信頼を得てきました。

そして、昭和12年に旧土人保護法の改正によって白老病院が閉鎖された後も、同じ場所で「高橋病院」を開業し続け、生涯白老町にて暮らし続け、昭和30年には白老町名誉町民第一号を授与されました。

昭和35年に78歳で亡くなった時には、葬儀は町葬で行われ、1000人にもものぼる人々が見送ったといえます。

#### (1)視察先

##### ①小山市教育委員会

教育長、教育部長、小山市立博物館館長と懇談

小山市における高橋房次氏の認知度について等を懇談した。

##### ②小山市乙女

現在の高橋家、間々田尋常小学校跡地、乙女八幡宮

生誕の地やゆかりの地を巡った。

##### ③小山市立博物館

小山市立博物館30周年記念第61回企画展「小山で生まれたアイヌコタンの医師 高橋房次」の説明と現在の展示を見学した。

#### (2)所感

高橋房次氏は「生誕の地である小山市ではなく、なぜ白老町で開業をしたのか」このような声が小山市では聞こえた。小山市は合併して市になったが、明治時代は乙女村で医療体制も不足していたという話もあった。

乙女で育った幼少期に母親から「大きくなったら世の中の貧しい人のために働きなさい」と口ぐせのように聞かされたといい、高橋房次氏が医師を志すことやその後の生き方に影響を与えたのではと考えさせられる。

小山市では高橋房次氏の存在や業績が知られている事がすくなかったと感じた。小山市立博物館30周年記念第61回企画展で「小山で生まれたアイヌコ

タンの医師「高橋房次」が実施されていた事により、資料が作成され残した言葉を拾いながらその生涯を振り返る事が出来た。

白老町名誉町民第一号である高橋房次氏を後世に語り続けていくうえで、白老町でも企画や生涯を伝える映像化などが必要と考えられる。

**房次が通った学校** 房次が小学校の就学年齢となった明治22年(1889)頃、乙女村は間々田村などと合併して間々田村の一部となっていた。房次は間々田村にあった間々田尋常高等小学校に入学したものとと思われる。その後、栃木中学(現県立栃木高等学校)に進学したとされているが、同校の卒業生に房次の名は残されていない。その後医療を学ぶため入学した済生学会には、入学資格に学歴などの規定がなかったため、中学中退の後、済生学会の門を叩いたという可能性も考えられるが定かではない。

**間々田尋常高等小学校跡地**  
房次が通った当時の校舎は「木造平屋建杉皮屋根の益腐な建物」が二棟、これを結ぶように、木造平屋瓦葺きの校舎が箱形に建っていた(『間々田小学校創立百年記念誌』『明治の小学校』三井要介氏より)という。

**現在の間々田小学校**  
房次の後輩たちが学ぶ学校。房次が医師となっていた明治36年(1903)、房次が通っていた学校の校舎は暴風雨により倒壊。これをきっかけに学校は現在の間々田小学校の場所に移転した。

**相撲と房次**  
房次の生家のほど近くには、乙女地区の氏神である乙女八幡宮が祀られている。この宮では古くから大祭に奉納相撲が行われ、乙女は現在でも相撲が盛んな地域である。  
「ある日、房次が八幡宮の境内で相撲をとって遊んだことがあった。上級生から行可をやれといわれ、『ハツケヨイ』まではよかったが、車配を差し過ぎてしまい皆にからかわれ、泣きながら家に帰った」(北海道総務部編『高橋房次/コタンの老医師「開拓につくした人々」』)というエピソードが残されている。

**乙女八幡宮**

**乙女八幡宮奉納相撲(平成23年)**  
熊谷良次郎氏提供

高橋房次氏が通っていた学校跡など

※小山市立博物館30周年記念第61回企画展「小山市で生まれたアイヌコタンの医師「高橋房次」から抜粋

## 2. 群馬県 富岡市

### 調査事項：富岡製糸場を核とした観光振興・地域振興について

富岡製糸場は明治5年築の官営模範器機製糸工場であり、先進技術の国内伝播を目的として設置された。明治26年に民営化され、昭和62年まで操業されており閉鎖後も管理人が常駐し状態良く保存されていた。

日本が開発した絹の大量生産技術は、かつて一部特権階級のものであった絹を世界中の人々に広め、その生活や文化をさらに豊かなものに変えた。日本の近代化を支えた製糸業の技術革新を象徴する製糸工場である。

#### (1)視察先

##### ①富岡製糸場

世界文化遺産旧富岡製糸場を活かした観光まちづくりについて、説明と質疑応答をする。

##### ②富岡市庁舎

富岡製糸場からまちなか周遊バスを利用し移動。まちなかの様子や変化を確認した。

#### (2)所感

富岡製糸場が世界遺産に登録される前は、富岡中央地区土地区画整理事業が計画されており公共施設充当用地の先行所得などされていた。

しかし、富岡製糸場の世界遺産登録された事からまちづくりを大転換し、開発型の区画整理事業から地域資源を活かしたまちづくりを実施していく事になった。また、市には観光に関する部がなく新たに世界遺産観光部を設立し様々な施策に取り組んだ。

世界遺産の保護を実施するため、資産登録区域(国内法での保護及び管理体制が整っている地帯)と衝動地帯(都市計画法、計画法、景観条例などで利用を制限する地帯)を区分けする事により、富岡製糸場への観光と歴史的まちなみを活かす取り組みが進められた。

また、まちなみを周遊するバスには運転手だけではなくガイドも常駐する事によりまちの魅力を発信している。白老町でも周遊バスが運行しているので、ガイドを常駐する事でより、まちの魅力発信や商店街への周遊に繋がるのではないかと考えさせられた。

# “富岡製糸場を核としたまちづくり”



## 富岡市庁舎周辺のまちづくり

・設計: 隈研吾建築都市設計事務所



富岡製糸場と庁舎周辺のまちづくりイメージ図  
 ※視察資料から抜粋